

「元服」(げんぷく／げんぶく)

もともとは古代中国の儀式にならった成人の儀式で、^{ういこうぶり}初冠などともいい、髪を切り、服を変え、冠を加えました。元は首、服は冠を意味しています。

飛鳥時代に冠帽の風習が定着してから、元服前の頭頂を露出(＝露頂)している童^{わらわ}と元服後の成人とに区別されるようになり、年齢にかかわらず、元服をしていないと成人とはみなされませんでした。

天皇の元服には加冠、理髪、能冠の三役があり、吉日に最高の儀式で盛大に挙行されました(皇太子や親王以下では一部を省略)。国史では「続日本紀」に和銅7年(714)第一皇子(のちの聖武天皇)が14歳で元服したという記事があり、これが最古の事例です。

将軍の元服では北条家(鎌倉幕府)、管領(室町幕府)、井伊家(江戸幕府)が加冠役をつとめました。武家は、中世になると^{えぼし}烏帽子をかぶるようになり、烏帽子親子は実際の親子に準ずるものとされました。さらに室町時代中期になって露頂の風習が普及しはじめると、次第に前髪を落として済ませるようになり、庶民にも普及していきました。

